陳舜臣さんを語る会通信

NO.26　Feb.　2021

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel. 078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2021年2月1日

頭の中の諸葛孔明像、あえて無視した『諸葛孔明』

本号では『諸葛孔明』を、そして次号では『曹操魏の曹一族』をとりあげます。

陳舜臣『諸葛孔明』の解説で稲畑耕一郎氏は、同著を「孔明小説の濫觴（らんしょう）」とおっしゃっています。濫觴とは「もののはじまり」ということですが、諸葛孔明に関する書物は数多いが、小説は、陳舜臣『諸葛孔明』が初めてだというのです。驚きです。

同著は、下にあげた陳さんの「あとがき」にもあるように、季刊『中央公論文芸特集』に1985年秋から90年秋まで連載され、91年春に単行本として上梓されました。この年、同作品で吉川英治文学賞を受賞しています。

（編集委員　橘雄三）

中公文庫表紙 →

中公文庫『諸葛孔明』「あとがき」から引用

文中、傍線は編集委員加筆

この作品は雑誌『中央公論文芸特集』に、五年余にわたって連載したものである。

史上の英雄を、ふつうの人間が小説に書こうとすれば、誇大化か矮小化のいずれかにおちいりやすい。できるだけ実像に近いものをさぐり出すには、史料の丹念な吟味が必要であろう。連載をはじめてから、発表誌が季刊であることに、どれほど感謝したかわからない。吟味のための時間が、じゅうぶんにあったからである。もっともたっぷりあったはずの時間を、有効につかったかどうかについては、いささか自信がない。

諸葛孔明の生涯が人びとに感動を与えるのは、乱世に真正面から立ちむかった彼の誠実さと、志を遂げずに死んだ悲劇性によってであろう。

人がどんな志を抱くかは、時代によってその内容は異なる。なによりも時代を深く知ることが、歴史に登場する人物を理解する王道であるといえよう。私のこれまでの歴史小説の作法は、時代を知ることからはじめた。この作品も例外ではない。時代をえがいているうちに、人物がうかびあがってくる。ペンを進めながら、それを待ったのだが、この作品ほど時間に恵まれたケースはまれであった。

一九九一年一月
六甲山房にて　陳舜臣

陝西省漢中市勉県にある
諸葛孔明の墓、武侯墓
tripriple.com より

頭の中の孔明像を無視して全然違う諸葛孔明にしてしまった

傍線は編集委員加筆

本来、歴史小説のオーソドックスな書き方というのは、作家の頭の中にこの人物はこういう人だという像がまずあり、その人を中心にして当時の状況を眺め、資料を調べ、世界を作っていくものだと思います。

もちろん、私の頭の中にも、自分なりの、歴史上に実在した人物としての諸葛孔明像というものはあるんですが、今回はあえてそれを無視して全然違う諸葛孔明にしてしまった。（中略）

何といっても諸葛孔明はこれまで多くの先人によって書かれてきていて、十指に余る作品があります。今さら私が書いてもなあ、という気持ちがあったことは確かです。

（『本の話』二〇〇四年一二月号）

『諸葛孔明』時代背景と登場人物

《 1．後漢、短命な皇帝と外戚、宦官の勢力伸長 》

この節については、本通信27号にも同じテーマでの記述がありますので、併せてお読み下さい。

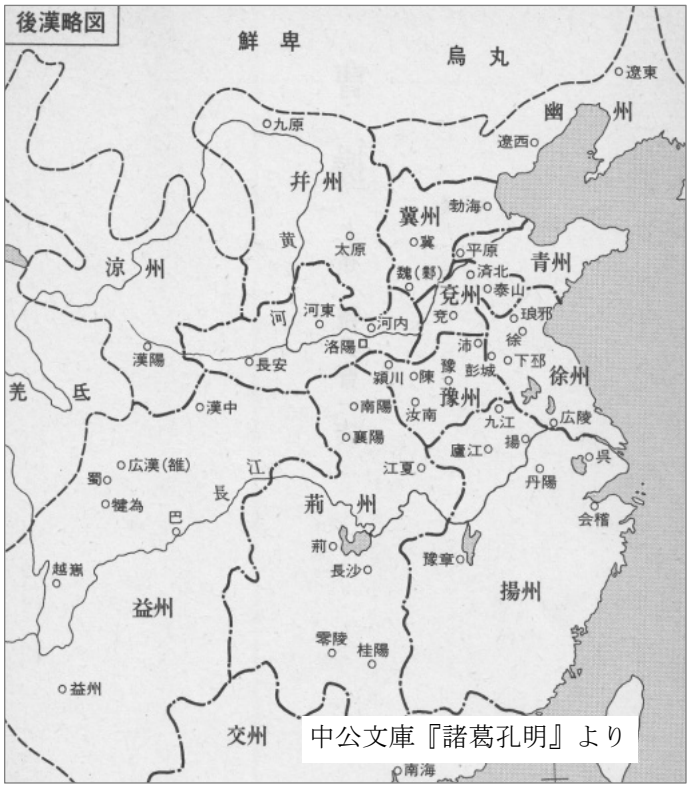
『諸葛孔明』から引用します。

後漢の皇帝は短命な人が多い。初代の光武帝（劉秀）の六十二歳というのが最も長命で、つぎが二代皇帝明帝（劉莊）の四十八歳であり、それ以後、四十歳をこえた皇帝はいない。だから、歴代皇帝は幼くして即位している。これは側近、すなわち外戚と宦官の力が強くなることを意味した。

三代皇帝の章帝（劉炟）は十八歳で即位し、三十一歳で死去した。その後、十人の皇帝が立ったが、なかには生後百余日で即位した例もあれば、二歳で即位した例もある。この二人はいずれも即位の翌年に死んだ。だから、皇統は傍系にうけつがれた。十代の質帝（劉纘）は聡明であったが、そのため外戚の梁冀に毒殺された。九歳だったので、もちろん嗣子はいない。その従兄にあたる劉志が十五歳で即位した（桓帝）が、これが章帝以後の十一人の皇帝のうち、最も年長の即位であり、三十六歳死去というのも、最後の献帝を除けば最長命なのだ。（中略）

前述したように皇帝の短命、幼少の皇帝の即位が重なって、外戚と宦官とが権力を握るようになった。皇帝独裁体制下にあっては、皇帝の側近の力が強くなるのはとうぜんであろう。

このような状況下で党錮の禁（166、169）が起こり、更に、黄巾の乱(184年)が起こりました。



中公文庫『諸葛孔明』より

《 2．登場人物 》

しょかつけい 諸葛珪	琅邪(ろうや)陽都の人。泰山(たいざん)郡の丞をつとめる。192年死去
	瑾、鈴、亮、均の三男一女がいる。子どもたちの母は、均を産んだとき、産褥で死去。その後、同僚・張長史の「美しすぎる」未亡人・宋氏が後妻に入る。宋氏との間に子は生まれなかった
きん 諸葛瑾	孔明たちと別れ、父の後妻宋氏と行動を共にする。のち、呉に仕え、大将軍、左都護に昇進し、宛陵侯に封ぜられ、予州の牧を領する
れい 諸葛鈴	鈴、亮、均の３人は、叔父諸葛玄と行動を共にする。18歳で襄陽の名門、龐家の龐山民(ほう　さんみん)に嫁ぐ。婚礼で、叔父諸葛玄が病のため、17歳の孔明が家長代理をつとめる
りょう 諸葛亮	字は孔明。臥竜先生。襄陽の名士、黄承彦の娘、綬(じゅ)を娶る。襄陽の郊外、隆中の草廬に住む
諸葛均	林氏の娘を娶る。兄孔明夫婦と同居
げん 諸葛玄	諸葛珪の弟。中央政府の官僚として洛陽勤めの経験があり、有力者に知人が多い。その中から劉表を選び身を寄せる。予章郡太守の時、戦で負傷。傷がもとで死去(197年)
かんかい 甘海	諸葛家の執事。情報屋。時代解説者。人物鑑定家許劭(きょ　しょう)の秘書の文波(ぶん　ぱ)とは心を許した仲

登場人物は上記、諸葛家の親族と執事にとどめ、よく知られた三国志の英雄、武将は省きました。

《 3．天下の形勢 》

『諸葛孔明』「若者たちの歌」の章の時代。

呂布が死に(198年)、袁術が死に(199年)、大勢力は次の三つとなった。天下三分前夜です。

［**袁紹**…本拠は冀州］北方の雄。群雄のなかで最強の集団を率いる。東北に蟠踞する烏丸族とも結ぶ。

［**曹操**…豫州沛国譙県出身］192年、青州黄巾軍を吸収し一大勢力となる。196年、長安から逃げてきた献帝を迎え入れる。

［**劉表**…荊州の襄陽を本拠とする実力者］「座談の客(口さきだけの人間)」。疑い深く、優柔不断。孔明の叔父諸葛玄は、親交のあった劉表を頼る。

このうち、袁紹と曹操とは、対立関係にあり、袁紹と劉表は、むかしから友誼があった。曹操が袁紹を倒すのは、200年の官渡の戦い。

これら三大勢力に、中勢力として、江東の孫策(26歳で死亡し、弟**孫権**が後を継ぐ)や、風雲を待つ**劉備**らが力をつけてきます。

孔明が劉備に仕えたわけ

孔明が劉備に仕えたわけを
『諸葛孔明』から探ってみます
文中、傍線は編集委員加筆

『諸葛孔明』「乱世に生きる」の章で、曹操の復讐戦のあと、十四歳の孔明が徐州の下邳を通り、白骨化した遺骸が残る惨状を目にする場面があります。後年、孔明が劉備の軍師となる伏線です。詳細は本通信27号をお読み下さい。

以下、『諸葛孔明』「南北の英雄」の章から引用します。

孔明は少年時代に、徐州における曹操の大虐殺をみている。あれは許せることではない。たしかに、三人の一流英雄のなかでは、曹操は傑出しているといってよい。孔明もそれは認めるが、心のなかで、曹操にだけはけっして仕えるまいと誓っていた。

（天下の大英雄は、この三人だけではあるまい。…）

孔明は新しい英雄の出現を待望していた。

孔明夫婦の会話です。引用します。

「乱世ねぇ。…」

綬の顔がすこし曇った。（中略）

「私たちは、なにも好きこのんで乱世に生まれたのではない。（中略）自分たちも含めて、いまこの世に生きている人たちのために、なにかお役に立ちたいとおもう」

「あなたならできるわ」

綬の目はかがやいた。

「いや、それのできる人を援ける。私にできるのはそんなところだ」

「では、できる人をみつけなければなりませんね」

「そうだ。…はたしてみつかるかどうか。…縁があれば…」

劉備が曹操に破れた時のことです。引用します。

――衆を棄てて走る。

という惨敗であった。

小沛にいた劉備の妻は、曹操軍の捕虜となったのである。（中略）

「だらしがありませんね」

報告し終えて、甘海はそう言った。

孔明は腕組みをしたまま黙っていた。

「あら……」

そばにいた綬は、甘海のことばに相槌をうたなかった夫の顔を、のぞきこむようにして首をかしげた。甘海がその場を立ち去ったあと、孔明は幼い妻にむかって、

「劉備は私たちが考えている以上に、たいへんな人物かもしれない」

「どうしてでございましょうか？」

「劉備夫人はなんども擒になっている。頻繁すぎるではないか」

「さようでございますね」

（中略）

「三度だ、この五年のうちに」

（中略）

「妻子は、そんなにかんたんに棄てられるものではない。劉公は敗走するにあたって、人質を置いたのではあるまいか」

（中略）

「端倪すべからざる人物か」

ぽつりと彼は声をもらした。

引用を続けます。

劉備といえば、すぐに関羽が連想される。ほかに張飛という勇将もいるそうだ。だが、その幕下に知謀の士がいることはきかないのである。

「三顧の礼」

孔明と劉備の出会いの機は熟してきます。

劉備が襄陽郊外隆中の孔明の草廬を訪ねます。

いわゆる「三顧の礼」です。

互いに胸中を吐露し、孔明は、

「では、新野へお供いたしましょう」

と劉備に仕える決意を表明します。

二〇七年、孔明二十七歳のことです。

天下三分の幕開け

「三顧の礼」の翌208年の、劉備・孫権連合軍と曹操の「赤壁の戦い」で「天下三分の計」の幕が上がります。分量的には、『諸葛孔明』のほぼなかほどですが、これからは『三国志演義』等でよく知られたストーリーとなりますので、あらすじの語りはここまでとしておきます。

ＮＨＫ ＢＳ103 放映『古代中国 英雄伝説 曹操と孔明』を紹介します

《 1. 2009年、曹操墓を発見 》

この番組は、2020年11月30日に放映されました。20分の短い番組です。

まず、曹操墓の発見の出来事を紹介しています。

ナレーターが、

2009年、中国の考古学界を驚かせる大きな発見がありました。国家文物局が曹操の墓を発見したと公表したのです。

と声を震わせます。

発見されたのは、河南省北部、安陽の郊外、西高穴村という所です。

副葬品の名称を記録した石牌が出土し、墓が曹操のものであると決定づけました。

石牌には、「魏武王常所用挌虎大戟（ぎのぶおうつねにもちいるところのかくこだいげき）」と彫られていました。「武王」は曹操の諡で、「大戟」は三国時代に使われていた武器です。

なお、曹操墓の発見については、2019年、九州国立博物館が特別展「三国志」を開催し、上述石牌を展示したり、曹操墓を実寸で再現したりしているので、信憑性は高いと思われます。

番組では、墓の紹介で、副葬品の少なさをとりあげています。

この時代は、儒教の影響で、墓を豪華に飾る「厚葬」が奨励されていましたが、曹操は、儒教嫌いで、合理的な思考の持ち主であったので、死にあたって、「薄葬」を遺言したというのです。

正史『三国志』に記された曹操のことばです。

「斂以時服、無蔵金玉珍宝（遺体を包むには平服をもってし、金玉珍宝をおさむる事なかれ）」

陳舜臣さんは当然、『三国志』を読んでおられ、『曹操 魏の曹一族』で、曹操の遺言として、次のように記述されています。

――天下はなお未だ安定していない。いまはふだんの時ではない。したがって古来のしきたりにしたがうことはできない。葬がおわれば、みな服喪を除き、兵をひきいて軍務に服している者は、勤務地から離れてはならぬ。役人はおのおのその職務をつづけよ。納棺には平服を以てし、金玉珍宝を副葬してはならぬ。

《 2．諸葛孔明の奇略縦横は本当？ 》

他に、この番組で興味深かったのは、諸葛孔明の才能についてです。

「赤壁の戦い」にふれ、ナレーターは、

『三国志』に、曹操の敗戦が記されているものの、孔明の軍略については何も記されておらず、むしろ、軍師としての才能を疑う記述すらあります。

と語り、

『三国志』の「奇謀為短（臨機応変の軍略は得意でなかった）」という箇所をあげています。

この点についても、陳舜臣さんは、孔明の奇略縦横といった『三国志演義』のイメージを払拭して『諸葛孔明』を執筆されました。面白みに欠けますが、玄人受けするのが陳舜臣作品です。

あと、番組では、イ族の英雄、孟獲の反乱及び鎮圧を描いています。孔明は孟獲を７度捕らえ７度釈放します。

『三国志』は、「孟獲を赦し、以て南方を服す。心を攻めるを上策とす」と記しています。